

14枚、二段目15枚で二段。後部分に鉄小札をまぜるが、御立拳は三段で、一段目小札19枚、二段目20枚、三段目20枚。ただでなく、前草摺一段目も胴をぐるりとめぐる長側は、鉄小札まぜとするから、少し四段で、上の一段目から、58枚・60枚・62枚・64枚。前後左右の草摺は、各五段で、最後の最下段(菱縫板)は、馬上で鞍にまたがる必要から二分裂する。後の草摺は一段目から26枚・28枚・30枚・32枚・そして五段目は34枚。前の草摺は25枚・27枚・29枚・31枚・33枚。弓手(左)の草摺は24枚・26枚・28枚・30枚・32枚。馬手(右)の草摺は20枚・22枚・24枚・26枚・28枚。いずれも下段にむかつて小札が二枚ずつふえて幅を順次に広める規則性がある。同じ規則性は長側部分でも指摘できるのである。鎧兜は、当時からきちんとしたプランに従って規格品として制作されていたのである。

平安後期の大鎧は、胴の前

空星で、大きなものはその直径が16mmもあるので厳星と称されるのである。

八幡座(天辺)の金物は五重。玉縁(内径52mm)・小刻二重・裏菊そして一六弁の葵葉座。その葵葉座に一六個、正面三条の鍍金の篠垂には、左右五個、正面六個の鍍銀の星をうつ。金銀のとりあわせは平安時代の華麗な好みである。

鉢の天辺(八幡座)と篠垂の金物をすべて鍍金銀の銅製とし、矧ぎ板のあわせ目を立てて捻返とする手法、意匠は、この御嶽神社の赤糸威大鎧を最初、最古の例とする。

また鉢を左右側面から矧ぎ初めて前後で張りよめる手法も赤糸威大鎧に初めてみる新しいもので、以後、鎌倉時代の鉢の定式となる。

大袖冠板の櫛形状を思わせる輪郭、小さな胸板のなだらかな曲線、梅檀板や鳩尾板の角ばらない三つ山形、くび

れのない大きな壺の板、力強い縦の反り。平安時代の優美と初期の力強さがある。

また、現在、袖や草摺の菱縫板に小穴が残る。鍍金の裾金物の菊文を三個ぐらいつつとりつけたあとである。

重厚・豪壮で優美、華麗。まさに武蔵国の国府の最高の権力者、武蔵国留守所総検校職を代々相伝したという秩父氏の主流畠山重忠着用の伝説にふさわしい大鎧である。

残念なことに明治三六年(一九〇三年)の修理で、脇板を誤って新補、当時の様式と異なる肩を補い、高紐の付け方を誤った。また新補の威糸・絵草・緒とその付け方も疑問がある。

しかし、それらの欠点を補ってあまりある日本甲冑沿革史上、屈指の、否、無双の名品ということが出来る。ちなみに全重量約25・85kgである。

### 第二十一回武蔵御嶽神社

#### 新年奉納俳句入選作品集

奉納式 平成六年二月十一日  
選者 来住野臥丘

- 特選**
- 一席 初山の斧のこだまを送り合う 入間増岡蛭雪
  - 二席 穏やかな稜線遙か鳥渡る 福生高崎信子
  - 三席 土産屋の裏に声する三十三才 青梅榎戸富美子
  - 四席 神燈を継ぎ繋げる去年今年 秩父山中永大
  - 五席 初日射し胸豊かなる夫婦鳩 羽村中野李逸

#### 秀逸

- 陽の当る枝に結べり初神籤 入間上原清邦
- 初日影赤みの増せる松の幹 秋川芦澤喜久似
- 切株に冬陽浴びおり欲消えて 青梅野村春子
- 節刀の如く少年破魔矢享受く 青梅榎戸由造
- 初日透く萱間にともる茨の実 奥多摩加藤三好
- 注連飾くぐる見慣れぬ郵便夫 青梅須崎雲峰
- 初日見て待つ間の寒さ忘れゆく 府中石川有次
- 登山駅真下にあがる奴風 青梅持田佐智子
- うすうすと雪かかりいる青木に実 練馬鈴木啓子
- やわらかき陽に掌をかざし冬桜 福生鈴木順子

#### 選者吟

初空へ息深く吸い大きく吐く

来住野臥丘

#### 奉納俳句選評

紙幅の関係から、選評作品は上五音だけ記すので別掲の作品を参照して頂きたい。

- ◎「初山の」 初山は山始の意で新年の仕事始めであり、注連を張り供物を捧げ薪を伐って焚き、山神に無事を祈る儀式である。(こだま送り合う)に山で働く人達の素朴な挨拶と心の通い合いが見えて芽出したい。
- ◎「穏やかな」 (鳥渡る)は秋の季語であるが、雁・鴨などの外つぐみ・ひわ・あおじなど小鳥類は冬渡つて来るのも稀ではなく、多くは群をなすのが特徴である。なだらかな稜線の辺りを渡る景を捉え、季語の秋冬に惑わず、その時その場で詠み上げて好ましい。
- ◎「土産屋の」 参道の土産屋さんでの作。土産物を見つけたから、地鳴きするみそさざいに耳を傾けたのは、如何にも俳人らしく類笑ましい。
- ◎「神燈を」 (去年今年)は昨日は去年、今日は今年の意で、年の境になるが俳句では去年の境になるが俳句では去年の境を思い、新しい年の感懐も詠まれている。この句は前者の場合で、継ぎ替えた新しい神燈で明るく新年を迎えた意。
- ◎「初日射し」 (胸豊かなる夫婦鳩)で豊かな新春が出た。
- ◎「節刀の」 (節刀)は將軍出征の折又は遣唐使に天子の与える刀。親に言われた通り行儀よく破魔矢を受ける少年が愛らしい。
- ◎「うすうすと」 (青木に実) 大正元年十月五日御岳山麓大久野村に生る。俳歴「寒雷」同人・現代俳句協会・多摩現俳協参与「霧の音」主宰。句集「日雷」「山椒魚」「冬樹林」上梓。産経新聞東京版俳句選五年間。

#### 選者紹介

大正元年十月五日御岳山麓大久野村に生る。俳歴「寒雷」同人・現代俳句協会・多摩現俳協参与「霧の音」主宰。句集「日雷」「山椒魚」「冬樹林」上梓。産経新聞東京版俳句選五年間。